

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第二十八回 北守南進

台湾開発は世界の植民地経営史にその名を残す成果である。成果を確実なものにしたのは第四代

総督の児玉源太郎であり、民政長官の後藤新平であった。児玉は日露戦争を満州軍総参謀長として指揮、凱旋の直後、脳卒中により逝去。後藤は児玉の意を受け初代満鉄総裁として大連に赴任。統治開始からここにいたる十年余の間に、台湾は本土からの経済的自立に成功、児玉と後藤の台湾開発における成果には赫々たるものがあつた。

しかし、この二人が台湾を去る直前、辞職を覚悟させられる痛恨事が起こつた。帝国主義時代の

荒波に日本はどう抗したのか、窮状を象徴するよ
うな歴史的事件に二人は遭遇したのである。

日本は日清戦争に勝利したものの、ロシアの強力な干渉を受けて遼東半島の清国への還付を余儀なくされ、さらに南下するロシアが満州そして朝鮮に迫ってきた。日本の生命線が風雲急を告げようとしていた。北の守りが日本にとっての絶対的な課題となつた。「北守」である。一方、日清戦争勝利によつて帝国主義勢力の一角を占めるようになった日本は、新たに膨張の場を南方に求めようとしていた。「南進」である。「北守南進」という概念を

備立した人物が第一代の台湾総督の桂太郎であった。総督就任を機に桂は伊藤博文、西郷従道、後藤新平とともに台湾を視察、直後に台湾統治のための基本的文書「台湾統治意見書」を認めた。そこにはこう記されている。

「わが日本帝国は、すでに日本海の安全を確保し、朝鮮半島を制し、ウラジオストク港というロシアの喉元を抑えている。日清戦争後の今日、時勢は一変しており、いわゆる『北守南進』政策を取り、日本海を延伸させて東・南シナ海につなげ、その沿岸各地に向かつてみずから進むという方針を樹てなければならぬ」

台湾を日本の南進の起点として廈門を中心とする南清一帯、さらには南洋諸島へと向けて国威発揚を図るべし、というのがその論理であった。

「台湾島は澎湖諸島を挟んで清国南部の沿岸に相對している。しかも対岸には廈門という要港がある。廈門と交流することによって南清一帯との關係を保ち、南洋諸国と連なり、はるか南海を抑える

という地勢に恵まれている」(筆者訳)

「小日本主義」という用語がある。これは明治から大正にいたる時期、軍事力による対外膨張主義へのアンチテーゼとして提唱された一つの観念であった。第二次大戦後の日本でも一時期もてはやされた観念でもある。しかし、三国干渉の屈辱を吞まされたとはいえ、日清戦争勝利後の国威発揚のあの時代にあつては小日本主義というような気分は国民のなかにはなかった。逆に膨張こそが時代を物語るキーワードであった。桂の意見書もこの時代思潮をすくい取ったものであった。

桂の南進論は児玉に継承された。児玉の関心は対岸の廈門にあつた。台湾統治を万全なものとするには対岸経営に実を収めることが重要であるとみた。児玉の「台湾統治ノ既往及将来ニ関スル覚書」にはこう書かれている。

「台湾島民の統治に効力を發揮するには、島内の暴力を収め、島民の心を捉えることが必要だが、これだけを主眼とすべきではない。対岸の福建省、

特に厦門の人々に関心を寄せ、厦門の人たちの心の向かう方位を見据え、台湾島民に安堵の気分を誘い、そうして台湾統治の目的を達するという方法を採らなければならない」(筆者訳)

何が必要か。香港に次ぐ良港の厦門を大いに活用すべきこと、台湾銀行厦門支店を開設し、総督府吏員を厦門領事館に常駐させることなどである。そんな提案がなぜできたのか。福建は他の列強の干渉を受けることのない日本の影響圏にあつたからである。明治三十一年に福建省不割譲条約が締結された。清国はフランスとの間でも海南島、広東、広西、雲南の不割譲を、イギリスは長江流域の不割譲を清国と条約していた。中国「瓜分」の一環であり、日本もこれに加わつたのである。

後藤もきわめて積極的であつた。台湾領有だけでは十分ではない。むしろ台湾は「帝国南進の先駆」でなければならぬ。後藤は兎玉に提出した「厦門支店設置ニ関スル意見書」のなかで「台湾の占領とは一つのステーション・コロニー」の適地をここ

に得たということであり、大陸南部を初め、南洋諸島の人民もまたわが国の恩恵に浴させなければならぬ」と主張した。ステーション・コロニーとは「南進の先駆」のことである。その中核が台湾銀行厦門支店であり、これは明治三十三年五月一日に開設された。

しかし事はそうスムーズには進まなかつた。北清地域で新興宗教集団、義和団の乱が勃発した。列強に国土を篡奪された屈辱が一般住民にまで波及したことを証す反乱であり、その無秩序な暴力に列強は悩まされつづけた。北京城内にある八カ国からなる列国公使館地域が無数の乱徒によって取り囲まれ、反撃する八カ国連合軍の兵站が尽きた。日本公使館書記生の杉山彬、ドイツ在清公使フォン・ケッテラーが殺害された。時の駐露公使・小村寿太郎は鎮圧後の列強との外交において日本が優位に立つためには、ここは日本が率先して出兵する必要があると断じた。本国政府に判断を仰ぎ、政府も出兵を決意した。

義和團の乱は福建にまで及びつゝ、あつた。品鎮圧を名目にロシアは遼寧に、イギリス、フランスは上海に兵を進めた。乱徒は長江を越えて南下の兆しをみせ始めた。座視していれば列強との関係において日本が後塵を拝するとみた児玉は、ここで厦門制圧を決意した。児玉は生粋の軍人である。陸軍大将・桂太郎に決意を打電、その返信を待つ。桂からの報には「勅ヲ奉ズ。左ノ訓令ヲ伝達ス」とある。左の訓令とは、派遣隊を編成し輸送準備を進め厦門近くを遊弋する艦船「和泉」の船長の指示を待て、というものであつた。いよいよよか、丹田に力を入れたその矢先、再び桂からの打電があつた。「砲台占領ヲ実行スルハ、我政府ニ於テ未ダ時機ニアラズト認ム」とある。

あまりにひどい。こんなことで台湾総督が務まるか、煮え湯を飲まされる思いであつた。人生最大の屈辱だが、自分は組織がすべての軍人だ。命令に背くわけにはいかない。こんな酷い情念に身を焼かれたことはかつてなかつた。

伊藤博文は當時は閣外にあつたものの、列強からの干渉や列強との確執を極度に嫌つており、その主張が閣議を動揺させ、桂もこれに抗することができなかつた。児玉の進退はきわまり、総督辞職願を後藤にもたせ上京を命じた。ロシアとの緊張が極度に深まるなかでこの最高の軍政家が辞任するとなれば、内閣は瓦解しかねない。戦わずして敗北か。ここで明治天皇による御聖断が降る。後藤は九月十五日に参内、拜謁を仰せつけられ、陛下から御学問所内で直々の御沙汰を受けた。異例のことであつた。

其職ニ留マリ朕ガ意ヲ安ンゼヨ

後藤は帰宅して児玉に伝える。児玉は総督室で一人男泣きに泣く。後藤は総督室の床に正座し感涙するのみであつた。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、成長のアジア、停滞のアジアで吉野作造賞受賞。八七年、『開発経済学』で大平正芳記念賞受賞。九〇年、『西太平洋の時代』でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、『神経症の時代』で開高健賞正賞受賞。二〇一一年、正論大賞。